

後ろ髪を引かれながらふるさとを離れる 二次避難という選択



▲町を一時離れる住民たちに手を振る佐藤仁町長（2011（平成23）年4月21日）

壊滅的被害を受けた南三陸町では、避難所の適正な受け入れ人数をはるかに超えた状態が続いていたため、一時的に環境の整った町外で避難生活を送ってもらおうと周辺自治体にいち早く支援を要請した。町内では、南三陸ホテル観洋が約600人を受け入れた。また、内陸部の登米市、栗原市、大崎市が二次避難者の受け入れを表明してくれたため、集団避難を実施するべく、2011（平成23）年3月26日に住民説明会を行った。

行方不明の家族を待ちたい、家族の通院をどうするのか、子どもが通学できるのか…。そう考えると、住民たちにとって町を離れる決断をすることは難しかった。住み慣れた地域から知り合いがいない場所に二次避難することは、特に高齢の住民たちにとっては不安だった。

意向調査を経て、同年4月3日に第一陣の500人が登米市、栗原市、大崎市、加美町の避難先に向かった。宮城県が旅行代理店とともに、二次避難先の温泉地での部屋割りや送迎バスの手配などを行った。南三陸町では、要介護者・通院者などを優先して、保健師がメディカルチェックを行いながら送り出した。鳴子温泉への避難者は800人を超え、山形県など県外へも二次避難が行われた。同年5月半ばのピーク時には南三陸町からの二次避難者は2,755人を数えた。